

# 鍛冶屋廻り遺跡

2010年

日田市教育委員会



調査区遠景（北から）



## 序 文

鍛冶屋廻り遺跡は、弥生時代の特定集団墓が確認された吹上遺跡と弥生時代後期の環濠集落や古墳時代初頭の豪族居館が確認された小迫辻原遺跡に挟まれた台地裾部にあります。

本書では、市道友田小迫線歩道設置工事に伴って、平成20年度に実施した鍛冶屋廻り遺跡の調査内容を報告しています。調査では近世以降の溝状遺構と道と思われる遺構などが確認されました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後の文化財保護や学術研究、地域の歴史を学ぶための教材などとして、ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に従事いただきました作業員の皆様、地元の方をはじめとして調査にご協力いただきました方々に、心から厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

## 例　　言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成20年度に実施した鍛冶屋廻り遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成20年度に市道友田小迫線歩道設置工事実施に伴い、日田市教育委員会が実施した。
3. 調査にあたっては、隣接地地権者の小笠希良氏をはじめとする地元の方々、ならびに市土木建築部土木課のご協力を得た。
4. 発掘調査は、表土除去等、遺構等発掘、記録作成、遺物取上げ、空中写真撮影、現場管理を株式会社九州文化財総合研究所に委託して実施した。
5. 発掘調査現場での写真撮影は担当者が行った。
6. 本書に掲載した遺構図の製図、遺物実測及び製図、遺物写真については雅企画有限会社に委託した。
7. 個別遺構図中の方位は真北である。
8. 遺物写真に付した番号は、実測図番号に対応する。
9. 出土遺物及び図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターで保管している。
10. 本書の執筆はI(1)の一部を行時、それ以外は若杉が行い、編集は若杉が行った。



日田市の位置

## 本文目次

I 調査に至る経過と組織	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の内容	4
(1) 調査の概要	4
(2) 遺構と遺物	4
1. 溝状遺構	4
2. 道状遺構	6
3. 土坑、ピット出土遺物	10
IV まとめ	11

## 挿図目次

第1図 鎌冶屋廻り遺跡周辺地形図 (1/5,000) .....	2
第2図 鎌冶屋廻り遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/20,000) .....	3
第3図 道構配置図 (1/150) .....	4
第4図 溝状遺構実測図(1) (1/50) .....	5
第5図 溝状遺構実測図(2) (1/50) .....	7
第6図 道状遺構実測図 (1/50) .....	8
第7図 溝状遺構及び道状遺構出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4) .....	9
第8図 土坑実測図 (1/40) 及び土坑、ピット出土遺物実測図 (1/3) .....	10

## 挿入写真目次

写真1 5号溝状遺構遺物出土状況 .....	6
写真2 道状遺構土層堆積状況 .....	6
写真3 発掘調査風景 .....	11

## 写真図版目次

巻頭写真図版 調査区遠景 (北から)	写真図版 4 上左 道状遺構検出状況 (北から)
写真図版 1 上 調査区遠景 (北東から)	上右 道状遺構発掘状況 (北から)
下 調査区近景 (南東から)	下左 道状遺構発掘状況 (北から)
写真図版 2 上左 1号溝状遺構完掘状況 (南から)	下右 道状遺構発掘状況 (北から)
上右 2号溝状遺構完掘状況 (南から)	写真図版 5 上 1号土坑発掘状況 (西から)
下左 4号溝状遺構完掘状況 (東から)	中 2号土坑発掘状況 (西から)
下右 5号溝状遺構完掘状況 (南から)	下 3号土坑発掘状況 (東から)
写真図版 3 上左 6号溝状遺構完掘状況 (南から)	写真図版 6 出土遺物
上右 7号溝状遺構完掘状況 (南から)	
下右 8号溝状遺構完掘状況 (西から)	

## 表目次

第1表 出土遺物観察表 .....	12
-------------------	----

## I 調査に至る経過と組織

### (1) 調査に至る経過

平成17年夏、次年度事業計画立案時における市土木課への問合せにより、平成18～19年度で市道友田小迫線自歩道設置工事が計画されていることを市教育庁文化財保護課が閲知した。当該工事予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である鍛冶屋廻り遺跡に近接し、立地環境から遺跡が存在する可能性があったため、今後の事業推進にあたっては双方で協議していくこととした。翌18年度には用地買収が一部進み、11月にその部分について予備調査を行った。調査では中世～近世とみられる溝・土坑・柱穴および青磁等の遺物が検出され、遺跡の存在が明らかとなつたため、工事前に発掘調査を実施する必要がある旨を土木課に報告し、鍛冶屋廻り遺跡の範囲を拡大する届出を県教育委員会に提出した。その後諸事情により事業期間が21年度までずれ込み、用地買収の進捗に応じて20年2月にも予備調査を行ったが、わずかに遺物の出土があったものの明確な遺構は検出されなかつたため、結局本調査は18年度予備調査対象地のみとなった。なお予備調査は用地買収の関係上本調査終了後の21年度にも2回実施しているが、遺跡の存在は確認されたものの密度希薄につき記録にとどめ工事着手とした。

上記の経過により、発掘調査は平成21年3月2日より着手した。以下に調査の経過を記す。

3月2日 調査着手。表土除去作業、フェンス設置等安全対策を行う。

3月3日 遺構検出開始

3月10日 遺構掘下げ、実測開始

3月18日 空中写真撮影実施

3月24日 作業終了

3月25日 埋め戻し、撤収作業を行い、調査終了。

調査終了後の3月26日に日田警察署長宛てに埋蔵文化財発見届を提出し、5月11日に埋蔵物の文化財認定を受けた。また、整理作業は平成21年8月4日～31日に行い、その後、遺物実測や遺構図の製図等の委託業務を10～12月にかけて実施した。

### (2) 調査の組織

調査関係者は以下のとおりである。(なお、職名・氏名は当時のままとしている)

平成20年度(2008)／発掘調査

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄(日田市教育委員会教育長)

調査統括 原田文利(日田市教育庁文化財保護課長)

調査事務 井上正一郎(同課長補佐兼埋蔵文化財係長) 田中正勝(同専門員)、塙原美保(同主査)

調査担当 若杉竜太(同主任)

調査員 今田秀樹 行時桂子(同主査)、渡邊隆行(同主任)、矢羽田幸宏(同主事)、比嘉えりか(同嘱託)

平成21年度(2009)／整理作業、報告書作成・印刷

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原多賀雄(日田市教育委員会教育長)

調査統括 原田文利(日田市教育庁文化財保護課長)

調査事務 北村羊(同主幹兼埋蔵文化財係長)、河津美広(同専門員)、塙原美保(同主査)

整理報告書担当 若杉竜太(同主任)

調査員 今田秀樹 行時桂子(同主査)、渡邊隆行(同主任)、矢羽田幸宏(同主事)、比嘉えりか(同嘱託)

整理作業員 中原琴枝

## II 遺跡の立地と環境

鍛冶屋廻り遺跡は日田盆地のほぼ中央に位置する吹上原台地北側の裾部に位置する。また、遺跡の北側は、辻原台地を望むことができ、さらにその北東には山田原、北西には宮原台地が広がる。こうした、「原(はる)」と呼ばれる、河川の浸食により形成された台地は日田市内に多くみられ、日田盆地を特徴づける地形である。

これらの台地には弥生時代や古代の集落を中心として多くの遺跡が存在するが、ここでは鍛冶屋廻り遺跡を中心として、台地及びその周辺の遺跡を概観する。

鍛冶屋廻り遺跡の南側にひろがる吹上原台地では弥生時代中期後半の特定集団墓、後期の環濠集落が確認された吹上遺跡がある<sup>⑪</sup>。また遺跡西側の台地上には、縄文時代の落とし穴状遺構が発見された朝日ヶ丘遺跡<sup>⑫</sup>、さらにその北側縁辺部では4世紀後半～5世紀前半の円墳である小追古墳や小追横穴墓群が展開する<sup>⑬</sup>。さらに台地の北側裾にある尾部田遺跡では縄文時代後期、弥生時代後期～古代の集落が確認されている<sup>⑭</sup>。

吹上原台地と谷を挟んだ北側の辻原台地に広がる小追辻原遺跡では、弥生時代後期の環濠集落や古墳時代前期初頭の環濠居館や「大領」銘の墨書土器が出土した。古代の官衙的な要素を持つ集落が発見されている<sup>⑮</sup>。また、辻原台地の南裾、鍛冶屋廻り遺跡と相対する位置には弥生時代～中世の集落が確認された本村遺跡がある<sup>⑯</sup>。特に弥生時代後期後半～終末にかけての集落はちょうど小追辻原遺跡で確認されている環濠集落とほぼ同時期にあたり、その関連性が窺える。

さらに辻原台地と谷を挟んで北西側にある宮原台地上には、弥生時代後期の集落や中世墓が発見された朝日宮ノ原遺跡が存在する<sup>⑰</sup>。また、台地南側の縁辺部では6世紀第2四半～第3四半にかけて築造された朝日天神山古墳群がある<sup>⑱</sup>。この古墳群は2基の前方後円墳から成り、2号墳は全長約85mと、後期としては県内最大級の規模であるとともに当時の大和の勢力と九州の勢力の関係を考える上で重要な位置を占める古墳である。

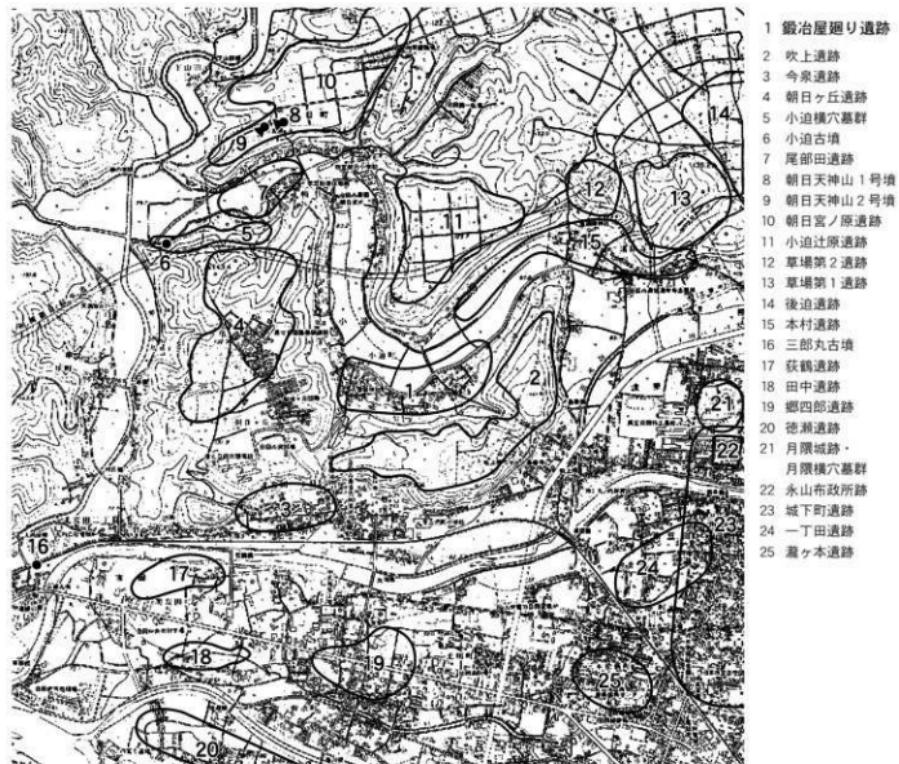
また、吹上原台地南側の狭い冲積地には、弥生時代～古墳時代にかけての集落が確認された今泉遺跡がある<sup>⑲</sup>。



第1図 鍛冶屋廻り遺跡周辺地形図(1/5,000)

(参考文献)

- (1)土居和幸編『吹上I～3～5次調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第42集 日田市教育委員会 2003
- 下村哲也編『吹上II～9～11次調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第52集 日田市教育委員会 2004
- 土居和幸編『吹上III～7～8次調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第57集 日田市教育委員会 2005
- 渡邊隆行編『吹上IV～6次調査の記録』日田市埋蔵文化財調査報告書第70集 日田市教育委員会 2006
- (2)五十川雄也編『朝日ヶ丘遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第18集 日田市教育委員会 2000
- (3)小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書3 大分県教育委員会 1995
- (4)行時志郎『日田条里上手地区・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集 日田市教育委員会 2001
- (5)田中裕介編『小迫辻原遺跡I・A・B・C・D区編』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10 大分県教育委員会 1999ほか
- (6)杉庭太『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書第51集 2004
- (7)土居和幸「朝日宮ノ原遺跡」「日田地区遺跡群発掘調査概報IV」日田市教育委員会 1989
- (8)杉庭太編『朝日天神山古墳群』日田市埋蔵文化財調査報告書第60集 日田市教育委員会 2005
- (9)渡邊隆行『今泉遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第37集 日田市教育委員会 2002



第2図 鍛冶屋廻り遺跡周辺の主要遺跡分布図 (1/20,000)

### III 調査の内容

#### (1) 調査の概要 (第3図)

調査は調査区内の石等の撤去を行った後、南側から括幅部分を幅2～3m、延長約31.5mの表土剥ぎを開始した。しかし、中央付近には電柱が立っており、その移転は工事実施時に行うことになっていたため、この部分については幅約1mと狭くなっている。

調査区の南側においては表土からの検出面である明褐色粘質土までの深さは約20cmであったが、北側にいくにつれて深くなり、最も深い北側で約60cmとなった。そのため、調査区内は現地形よりもさらに北側へ向かって急傾斜しており、標高は91.1～92.9mである。

検出された遺構は後述する溝状遺構や道状遺構、土坑のほか、ピットが數十個確認されたが、掘立柱建物を構成するような柱穴は確認されなかった。なお、3号溝状遺構としていた遺構は、調査中に道の可能性があることが判明したことから、本報告では道状遺構とし、3号は欠番とした。

#### (2) 遺構と遺物

##### 1. 溝状遺構

###### 1号溝状遺構 (第4・7図 図版2)

調査区の南側で確認された。長さは南壁から約5.8mを測り、北側は1号土坑に切られている。幅は約1m、深さは最も深い部分で約15cmを測る。遺物は陶器鍋とみられるものが出土している。

第7図1は鉄軸を施す。関西系か。

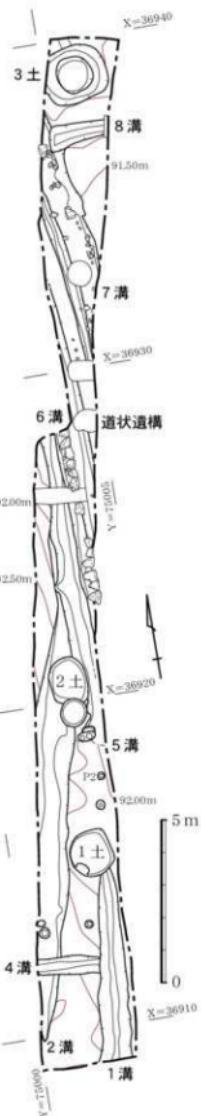
###### 2号溝状遺構 (第4・7図 図版2)

調査区の北側から中央付近で確認され、西側の肩の大部分は調査区外に広がる。南側を基点として、長さは約13mを測り、北側を2号土坑や5号溝により切られている。幅は最大約1.2m、深さは約20cmを測る。遺物は瓦質土器や土師質土器の火鉢、磁器碗、弥生土器甕が出土した。

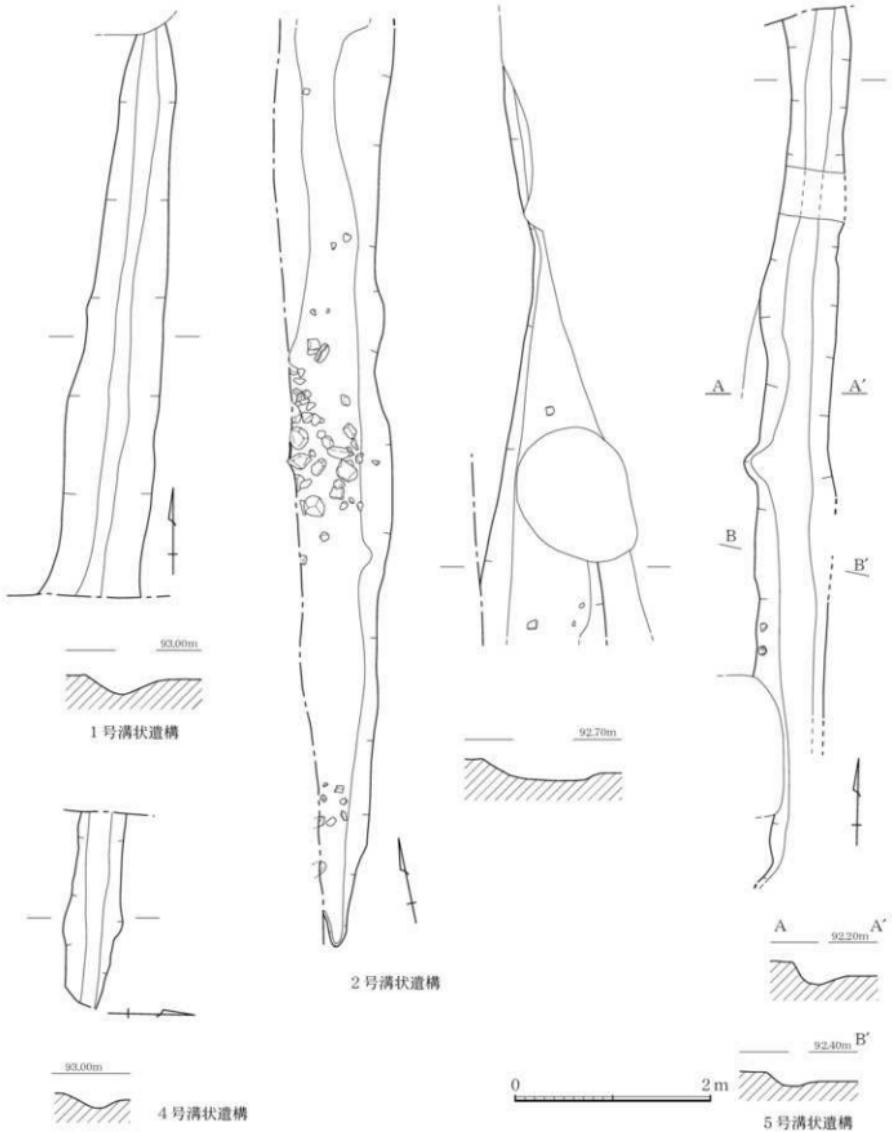
第7図2～5は火鉢である。2・5は瓦質、3・4は土師質土器である。2は外面の突帯下に菊花のスタンプ文、4は外面に施された2条の沈線の間に八角形のスタンプ文を施す。3・5は外面に貼付突帯が1条みられる。6・7は磁器碗である。6は外面口縁に圓線・みじん唐草、内面口縁に圓線を施す。7は青磁軸を施す。8は弥生土器甕である。流れ込みによるものと考えられる。

###### 4号溝状遺構 (第4図 図版2)

調査区南側で確認され、2号溝を切り、1号溝に切られる。この1・2号溝状遺構とほぼ直交し、調査区内での長さは約1.85m、幅約0.6m、深さは約10cmを測る。遺物は出土しなかった。



第3図 遺構配置図 (1/150)



第4図 溝状遺構実測図(1) (1/50)

#### 5号溝状遺構（第4・7図 図版2）

調査区中央付近で確認され、道状遺構及び2号土坑に切られる。調査区内の長さは約9.6mを測る。幅は約0.8m、深さは約15cmを測る。遺物は瓦質土器の火鉢が出土した。

第7図9の火鉢は、外面に2条の突帯を貼付け、その間には菊花のスタンプ文が施される。

#### 6号溝状遺構（第5・7図 図版3）

調査区の中央付近で確認され、4号溝状遺構を切り、道状遺構及び2号土坑に切られる。調査区内での規模は長さ約8.6m、幅約0.7m、深さ15～20cmを測る。遺物は陶器皿が出土している。

第7図10の陶器皿は肥前焼である。見込みには、蛇の目釉剥ぎが施される。

#### 7号溝状遺構（第5・7図 図版3）

調査区の北側で確認され、8号溝状遺構及び道状遺構に切られる。調査区内での規模は長さ約7.6m、幅約1.2m、深さは25～30cmを測る。後に道状遺構を作る際に、埋め戻され、一部が道状遺構の側溝として再利用されたと考えられる。遺物は陶器擂鉢などが出土している。

第7図11は陶器擂鉢である。握り目は9条を単位とする。12は陶器裏か？底面はやや上げ底氣味である。

#### 8号溝状遺構（第5図 図版3）

調査区北側で確認され、7号溝状遺構にほぼ直交し、これを切る。調査区内での規模は長さ約1.8m、幅0.5～0.8m、深さ約5cmである。東側は調査区外へ延びるが、西側は7号溝状遺構にかかる部分で途切れている。なお、平成21年度に現道を挟んで東側で実施した予備調査において、この溝状遺構の続きと思われる落ち込みが確認されている。遺物は出土しなかった。

## 2. 道状遺構（第6・7図 図版4）

調査区の北側で確認され、5～7号溝状遺構を切る。

調査区内での規模は長さ約13mを測る。幅については、両端を確認できる部分が検出されなかつたため、不明である。

路面は黄色系の土と灰色系の土を用いて版築状に填圧されていた。また、この遺構は基本的には5～7号溝状遺構を埋めて造られているが、7号溝状遺構は全てを埋めずに、中間付近で路肩を作り、半分は側溝として再利用していたとみられる（第6図の破線部分で確認）。さらに東側には灰石を配列させ、道の両側に側溝と石列を作ることで隣接地との境界の機能を持たせていたのであろう。

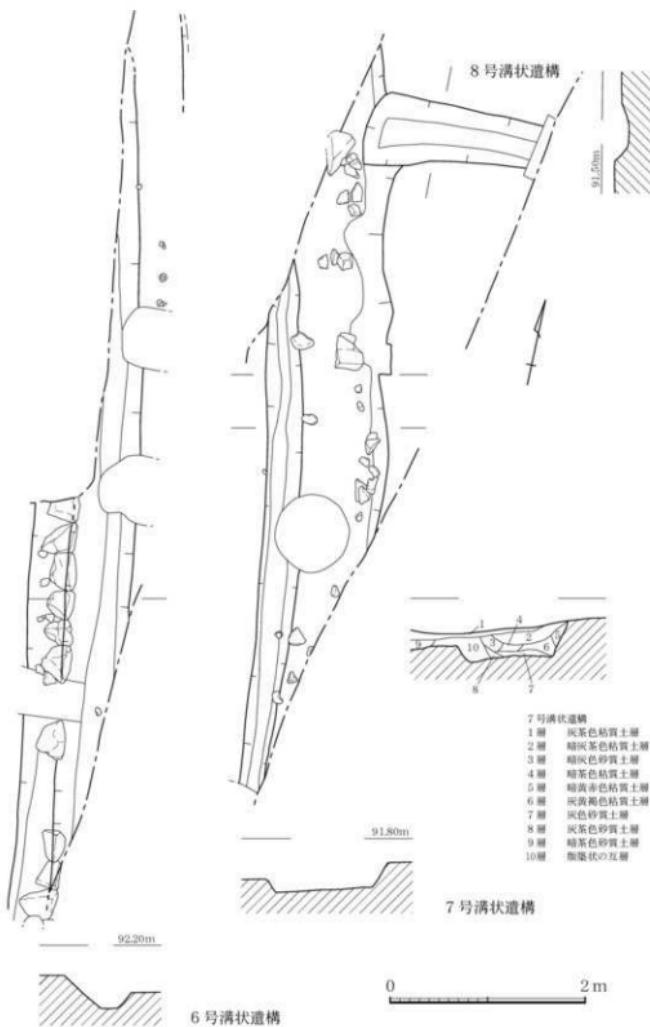
路面中より多くの陶磁器等が出土したが、路面の造成と同時に埋められものだと考えられる。



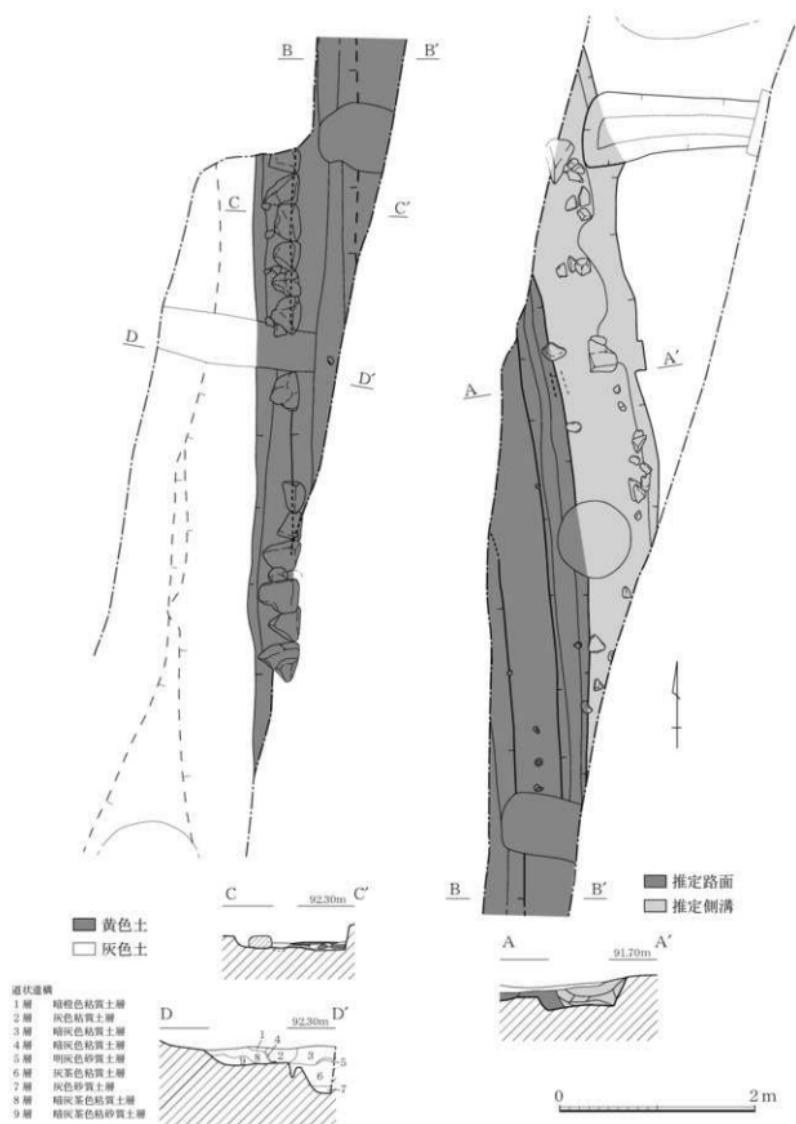
写真1 5号溝状遺構遺物出土状況



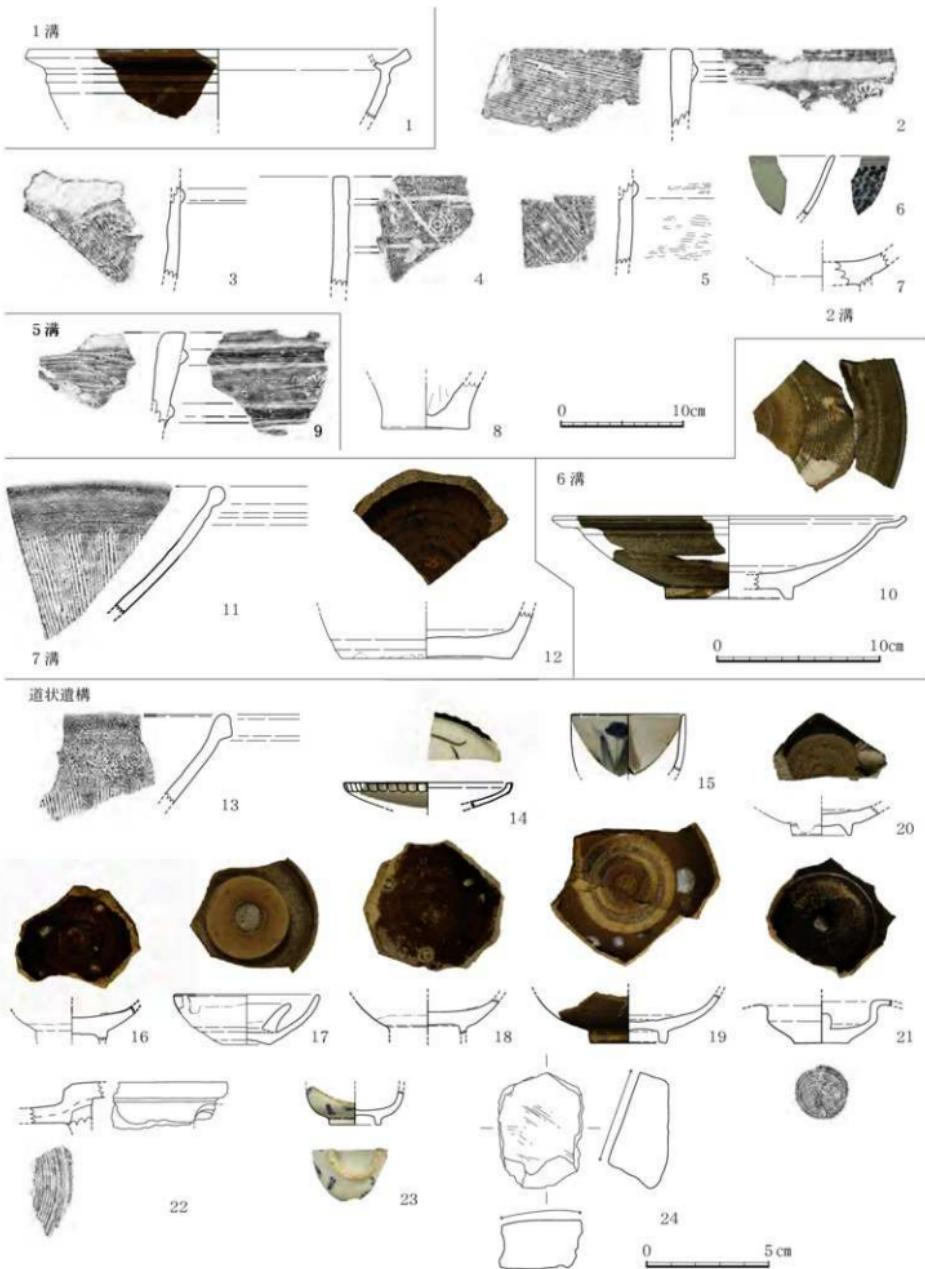
写真2 道状遺構土層堆積状況



第5図 溝状造構実測図(2) (1/50)



第6図 道状壙構実測図 (1/50)



第7図 溝状遺構及び道状遺構出土遺物実測図 (1/3、24:1/2・8:1/4)

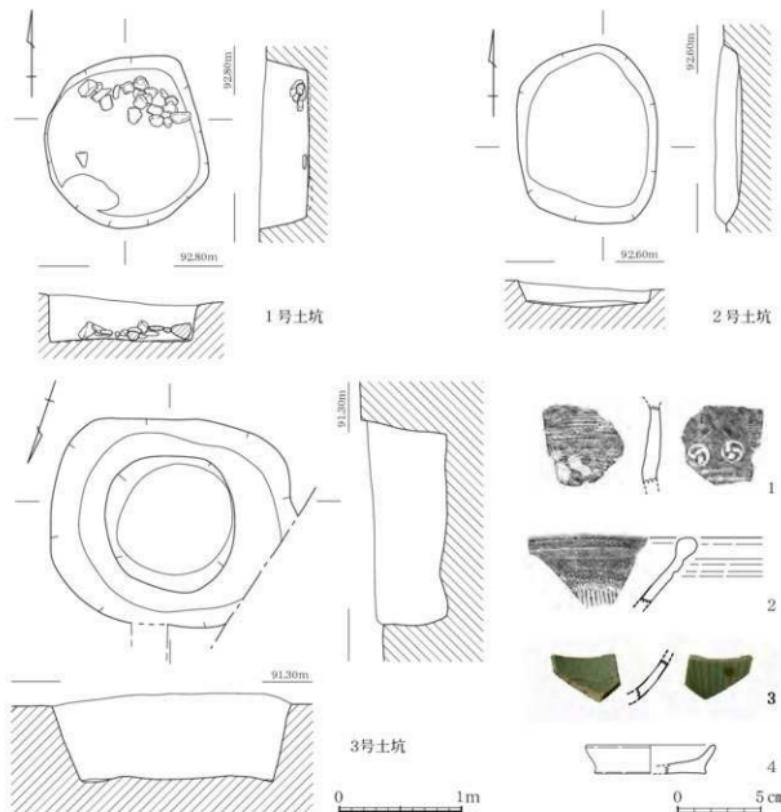
第7図13は陶器擂鉢、14は磁器皿である。13の擂り目の単位は9本である。15、23は磁器碗で、15は肥前系、23は関西系と思われる。第7図16、18~20は陶器碗である。16、18は見込みに目跡が3点見られる。また、19、20は見込みに釉剥ぎが見られる。17は陶器秉燭である。21は陶器蓋、22は土師質土器焜炉である。23は砥石である。

### 3. 土坑、ピット出土遺物

#### 1号土坑（第8図 図版5）

調査区の南側で確認され、1号溝状構を切る。平面形はやや歪な円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は水平である。規模は長軸約1.45m、短軸約1.25m。検出面からの深さは約30~40cmである。床面付近より20~30cm大の礫が多く検出された。遺物は土師質土器の鉢が出土している。

第8図1は外面に三つ巴のスタンプ文が施される。



第8図 土坑実測図 (1/40) 及び土坑・ピット出土遺物 (1/3)

### 2号土坑（第8図 図版5）

1号土坑の北側で確認され、4・5号溝状遺構を切る。平面形は橢円形を呈する。壁は長軸方向は緩やかに立ち上がり、短軸方向は急角度で立つ。床面は中央付近に向かって若干深くなる。規模は長軸約1.5m、短軸約1.15m、検出面からの深さは約10~20cmである。遺物は陶器の擂鉢や青磁碗が出土している。

第8図2は鉄軸を施す。破片のため、掘り目の単位は不明である。3は青磁碗である。外面には鶴文、内面には波状文が施される。

### 3号土坑（第8図 図版5）

調査区の北端で確認された。平面形は隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は中央付近がやや窪んでいる。この窪みに桶状の容器を据えていたと考えられる。規模は長軸約1.0m、短軸約0.85m、検出面からの深さは約30~35cmである。遺物は出土しなかった。

### ピット出土遺物（第8図 図版5）

第8図4はP2より出土した土師質土器小皿である。底部端は外側にやや突出し、口縁部は外傾して立ち上がり、端部を丸く仕上げる。

## IV まとめ

前章までに、今回の調査で確認された遺構や遺物についてみてきたが、最後に簡単ではあるがまとめてみたい。

まず、溝状遺構については、確認された7条のうち、5条はほぼ南北方向を軸としていた。調査地付近の地形は緩やかな谷地形で南から北に向かって傾斜しており、この地形に沿って掘削されている。その用途については断定できないが、調査地北側に広がる水田への用水路として利用されたと考えられる。

道状遺構については、調査地北側の集落内を通る里道と繋がるものと考えられる。また、地元の方の話によると、かつてこの付近に道が通っており、吹上原台地を越えて、南側へ続く道があったとのことである。字図には台地南側へ続くと思われる朝日トンネル上部を通る里道をはじめ、多くの里道が記されており（第1図）、この遺構がその一部であった可能性は十分に考えられる。

また、確認された遺構から出土した遺物は、15世紀後半から16世紀初頭の青磁や土師質土器が数点出土しているものの、殆んどが近世から近代の陶磁器である。その時期は第7図21など多くが18世紀後半頃のものとみられ<sup>(1)</sup>、溝状遺構や土坑はこの頃に掘削されたと考えたい。そして、詳細な時期は不明であるが、溝状遺構が使われなくなった後、道状遺構が造成されたのであろう。

### 註

(1)遺物の時周等は下記文献を参考にした。

河野史郎編『鶴崎町遺跡群（堀川）』大分市埋蔵文化財調査報告書

第57集 大分市教育委員会 2005

九州近世陶磁器学会事務局編『九州陶磁の歴年』九州近世陶磁学会  
2000

吉武牧子編『天祐館遺跡』佐伯市教育委員会 1998



写真3 発掘調査風景

第1表 出土遺物観察表

排団番号	団版番号	道構名	種類	器種	法量(cm) ( )は復元・残存			成形	装飾		備考
					口径	底径	器高		絵付輪葉	文様	
					(23.0)	-	(4.3)	ロクロ	鉄輪	-	関西系?
第7団1	1	溝	陶器	鍋?	(23.0)	-	(4.3)	ロクロ	鉄輪	-	関西系?
第7団2	6	2溝	瓦質土器	火鉢	-	-	(4.8)	ロクロ	-	外:スタンプ文 (菊花)	貼付突帯1条の下にスタンプ文
第7団3	6	2溝	土師質土器	火鉢?	-	-	(6.0)	ロクロ	-	-	貼付突帯1条残る
第7団4	6	2溝	土師質土器	火鉢	-	-	(6.7)	ロクロ	-	外:スタンプ文 (八角)	沈線2条の間にスタンプ文
第7団5	6	2溝	瓦質土器	火鉢?	-	-	(5.1)	ロクロ	-	-	貼付突帯1条残る
第7団6	2溝	磁器	碗	-	-	-	(3.4)	ロクロ	染付・透明釉	外:口縁に圓線・ みじん唐草 内:口縁に圓線	一部地模痕有
第7団7	6	2溝	磁器	碗	-	-	(2.2)	ロクロ	青磁輪(質入有)	-	
第7団8	6	2溝	糞生	甕	-	-	6.9	(3.8)	-	-	色調:内面・浅黃褐色、 外面・にぶい黄褐色 調整:ナデ 胎土:角閃石・斜長石、 白色粒
第7団9	6	5溝	瓦質土器	火鉢	-	-	(5.9)	ロクロ	-	外:スタンプ文 (菊花)	貼付突帯2条の中にスタンプ文
第7団10	6	6溝	陶器	皿	(21.2)	(7.6)	5.1	ロクロ	灰輪・白色土	-	肥前 見込み蛇の目釉剥ぎ
第7団11	6	7溝	陶器	擂鉢	-	-	(7.8)	ロクロ	鉄輪	-	織り目9条
第7団12	7溝	陶器	裏?	-	(10.6)	(2.9)	ロクロ	鉄輪	-	-	
第7団13	6	道	陶器	擂鉢	-	-	(5.5)	ロクロ	鉄輪	-	
第7団14	道	磁器	皿	(10.4)	-	(1.5)	ロクロ・割打	染付・透明釉	内:草花?	輪花・口跡	
第7団15	道	磁器	碗	(6.8)	-	(3.3)	ロクロ	染付・透明釉	外:草花	肥前系	
第7団16	道	陶器	碗	-	-	(2.1)	ロクロ	鉄輪	-	見込みに目跡3点有	
第7団17	道	陶器	壺	(8.8)	3.0	3.1	ロクロ	灰輪	-		
第7団18	道	陶器	碗	-	-	(2.2)	ロクロ	鉄輪	-	見込みに目跡3点有	
第7団19	道	陶器	碗	-	4.6	(3.0)	ロクロ	灰輪	-	見込み蛇の目釉剥ぎ (蛇の目釉剥ぎの中に重ね焼きの高台痕有)	
第7団20	道	陶器	碗	-	(3.6)	(1.8)	ロクロ	鉄輪	-	見込み釉剥ぎ	
第7団21	道	陶器	蓋	-	3.4	(2.7)	ロクロ	鉄輪	-	底部糸切り痕	
第7団22	6	道	土師質土器	焜炉	-	-	(2.9)	ロクロ	-	-	
第7団23	道	磁器	碗	-	(3.2)	(2.1)	ロクロ	染付・透明釉	外:樹木?・松葉	関西系	
第7団24	6	道	石製品	砥石	長さ4.7	幅3.5	厚さ2.5				重さ51.3g
第8団1	6	1土	土師質土器	鉢	-	-	(4.9)	ロクロ	-	外:スタンプ文 (三つ巴)	傾き不明
第8団2	6	2土	陶器	擂鉢	-	-	(4.0)	ロクロ	鉄輪	-	
第8団3	2土	青磁	碗	-	-	-	(2.5)	ロクロ	青磁輪	外:輪文 内:波状文	傾き不確実
第8団4	6	P2	土師質土器	皿	(7.8)	(6.6)	1.8	ロクロ	-	-	

※溝:溝状道構、道:道状道構、土:土坑

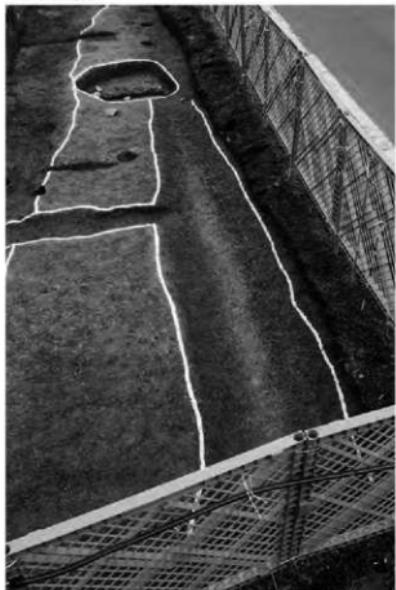


調査区遠景（北東から）



調査区近景（南東から）

写真図版 2



1号溝状造構完掘状況（南から）



2号溝状造構完掘状況（南から）



4号溝状造構完掘状況（東から）



5号溝状造構完掘状況（南から）



6号溝状遺構完掘状況（南から）



7号溝状遺構完掘状況（南から）



8号溝状遺構完掘状況（西から）

写真図版 4



道状遺構検出状況（北から）



道状遺構発掘状況（北から）



道状遺構発掘状況（北から）



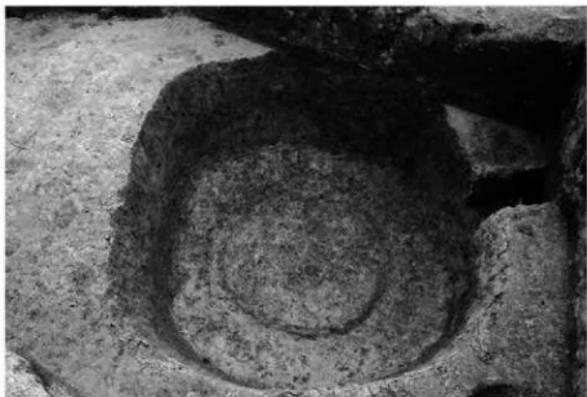
道状遺構発掘状況（北から）



1号土坑発掘状況（西から）

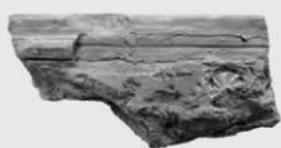


2号土坑発掘状況（西から）



3号土坑発掘状況（東から）

写真図版 6



7-2



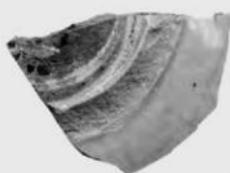
7-3



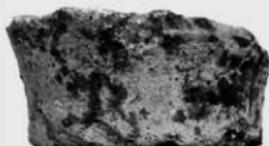
7-4



7-5



7-7



7-8



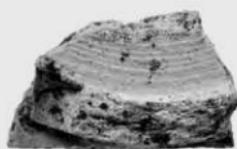
7-11



7-13



7-9



7-22



7-24



8-1



8-2



8-4

## 報告書抄録

ふりがな	かじやまわりいせき
書名	鍛冶屋廻り遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	92
編著者名	若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2010年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鍛冶屋廻り遺跡	大分県日田市 大字小迫 字小迫339ほか	44204-6	204084	33°19'58"	130°55'10"	20090302～ 20090325	63 m <sup>2</sup>	歩道設置

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鍛冶屋廻り遺跡	包蔵地	近世以降	溝状遺構7条 道状遺構1条 土坑3基	陶磁器 土師質土器 弥生土器 石器	

要約	<p>本遺跡は吹上原台地北側谷部の緩斜面に位置する。調査では溝状遺構、道状遺構、土坑などが確認され、時期は何れも近世以降と考えられる。</p> <p>このうち、溝状遺構は調査地北側に広がる水田への水路の可能性がある。道状遺構については、調査地北側の集落内や周辺にみられる里道の一部と考えられる。</p>
----	---

## 鍛冶屋廻り遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第92集

2010年3月15日

編 集 日田市教育庁文化財保護課

〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会

〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 尾花印刷有限会社

〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日 田 市